

烏森トレッキング回想記

第六回

日時：‘00. 8. 19 (土) ~ 8. 20 (日)

概略行程：

- 1日目 相模湖駅せきろうざん～石老山入り口けんきょうじ～顕鏡寺～融合見晴台～石老山 (694. 3m) ~
大明神展望台～渡船場～相模湖駅～ 宿泊ひめたに／姫谷温泉
- 2日目 (姫谷新道) ~陣馬山 (857m) ~ 明王峠みょうおうとうげ ~底沢峠～陣馬高原下バス停～
八王子駅

メンバー：米本、山田、吉川、森、磯崎

新緑を見送るも、やはり行きたやと、初めての夏山トレッキング。

行き先も、趣向を変えて、中央沿線のポピュラーコース、「石老山」と相模湖挟んで、「陣馬山」。

相模湖駅から、バスで、「石老山入り口」へ移動。

「石老山」は苔と奇岩、怪石の山。

苔むす旧参道の石段を踏みしめ、大岩に囲まれ、雨水も流れる登山道を辿り、随所で説明される岩石の案内板を、都度、“ふむふむ”と読む。

中腹の「顕鏡寺」に休み、手水で汗を拭く。

境内の銀杏の巨樹を指さし、“秋には、寺全体が黄金色に染まり、その様、何とも見事！”と説明するや、“なのに何故、この時期に訪ねたのか”とばかりの冷たい視線に気付き、思わず眼は点となる。

【余談13】“夏の山行く人の心は、高嶺の花に咲いて語らん”と唱われる様に、夏山の楽しみは、雪解け後、お花畑に咲き乱れる「高山植物」を訪ねる山行きに代表される。

巡り会うには、相応の高峰 (2, 000m内外) に登る必要があるが、交通路の開発が進められた今日、さほど難しい話でも無い。(ただ往々にして、そうした山は、「盗掘」等により人に荒らされているケースが多く、出会うにはやはりそれなりの“汗かき”が必要かも知れない)

しかし我々が計画する近くの低山となると、多くのガイド・ブックは、秋から、冬を挟んだ春迄を登山好適期と案内し、積雪時の春山、炎熱時の夏山登山は余り薦めていない。

夏山低山の楽しみを探すなら、「キャンプ」、「沢登り」辺りになるうが、思い切り汗を流す「涼感」も加えたい。

「融合見晴台」で一服し、朝の相模湖を遠望。
木テーブルにカメラをセットし、遠隔コントローラーで全員の写真を撮る。

汗を滴らせての山頂は、霞か雲か、富士は無論、丹沢方面の展望も無く、在るはむせ返る暑さと、うるさい虫の羽音のみ。それでも早速、朽ちた木テーブルに弁当を開き、毎度の楽しみながら、旨い旨いと頬を膨らます。

汗の乾く間も無く、急坂を大明神展望台に下り、眼下に水光る相模湖を、彼方に陣馬山、
かげのぶさん景信山（727.1m）、高尾山（599m）と高尾山系の連なりを眺望する。

しばし休息後、渡船場に向かい再下山。

目印の山麓垣根道を左に折れ、ジグザグ道を湖畔に下る。名も知らぬ垣根樹なれど、秋には深紅に染まり、周囲の紅葉と見事調和するを知るが、「北帰行」を唸りながら、“今は黙していかん”と知らん振り。

客が集まり次第出航する渡し舟は、我々が乗り込むや否や、舳先に一匹の犬が座り込む。友好的な風は無く、バランスを取るためかとも思うたが、船賃聞いて、下船を許さぬためと知る。

向かう先は、対岸の相模湖公園。

時期ならば紅葉、黄葉に染まり、湖面向こうの石老山（すなわち、現在地側）に夕陽沈むを見る、老いも若きも集まり、手入れ届いた嬉しい公園。

無論、到着するや否や真っ直ぐに、素知らぬ顔で相模湖駅へ。

【余談14】何と、その後のニュースにびっくり仰天！

湖畔の観光船業者（湖・巡航の遊覧船）2軒は、以前より商売敵で犬猿の仲であった由。通常は交替出航で、一方が客寄せ中は他方が呼び込みを自粛する決まりが、なんと今回、その掟を破り営業妨害をするばかりか、最終、殺傷沙汰にも及んでしまったとの事。

加害店は営業を休止したとのことだが、一見のどかそうな観光地にも、凄まじい闘いがあることを垣間見る。それにしても犬は見たが、猿は…？

宿は陣馬の湯、「姫谷温泉」。

陣馬山麓、栃谷川沿いの鉱泉湯にて、小振りながら露天風呂も整のえる高級宿。せせらぎの音は夜通し鳴り響き、窓に虫除け網戸有るも、冷房設備不要の「山の宿」。

風呂で汗を流し、浴衣に着替えて、さあ宴。

ビール瓶に滴る水滴を拭き、グラスを返して準備は万端、“さあさあ飲もう、さあ飲もう、

夏だビールだ、さあ乾杯、グビッ、グビッと喉の渴きを潤おし、さあ飲もう！”

あれれ、…、何故か不明も、メンバーは早々と寢床に就き、気持ち良さそうに寢息を和す。

窓際の籐椅子に座り、栃谷川のせせらぎ音を聞きながら、一人酒。

“まさか、昼間の意趣返しでもあるまいに…？”、“かと言って、案内状の「夜更けた山の出湯では、湯煙り向こうの岩陰に、浮かぶうなじの白い影」に備えて、早寝した訳でも…？”、“いやいや、ほど良い疲れに美酒が効き、つい心地良い眠りに誘われたに相違無し”と合点し、グビッと飲んで寢床に入る。

翌日も快晴。

朝食後、山宿では珍しい牛乳のデザートを馳走なる。

前日約束の、明王峠下までの車による送迎は、途中の通行止めを理由に断られ、当宿亭主が切り開いたとする新道（当方にて勝手に、「姫谷新道」と命名、途中で栃谷尾根登山コースに合流）に取り付く。

急な登りが連続し、早々に汗滴らせての歩きとなるが、途中、谷からの涼風が吹き上げる箇所、至る所に在り、何とも爽快、気持ち良い登山となる。

山頂は360度のパノラマ展望。

しかし、北面、奥多摩の山並はまずまずの眺望を見せるが、前日同様、南西方面、「丹沢」、「富士」、「南アルプス」は霞の中で姿を見せず、以前茶店亭主から聞いた「ヴェー・タイミング」、「冬場の寒冷期、強風、大雨等の翌早朝が良」、を思い出す。

茶店の亭主が我らの登山コースを訊ね、“**姫谷の親父は、あの下山路を、「藤野駅近道」と勝手に案内看板を立てているが、あれは自分とこ（姫谷温泉）への近道で、藤野駅には遠回り、何とも困った奴だ**”とコメントする。

山頂には茶屋が3店（富士見台、清水、信玄）あり、一軒は姫谷の親父の親戚筋と聞くが、この亭主は…？

尾根道を下り、富士の撮影ポイント、「明王峠」で小休止。

涼風を求め、樹間に座り込むと、心地の良さにしばらくは居眠りタイム。

夏の高校野球を聞きながら、木洩れ陽の尾根道を底沢峠に歩き、「陣馬高原下バス停」への急坂を下る。

滑落が懸念され、膝にも厳しい悪路を無事下山し、麓の清流で汗を流した後、林道を抜

けてバス停へ。

何とそこには、魚返夫妻が姉さんと！

聞けば、我々が下山路に取った道を登り、明王峠から陣馬山に歩き、和田峠へ下山。道中、夫人（旧黒田嬢）が脚を捻挫し、峠より車で送って来てもらったばかりとのこと。

と言うことは、途中、陣馬の尾根上でお互い擦れ違った勘定にもなるが、互いに気付かなかった訳である。因みに、最初に気付いたのは夫人で、山田氏の変わることのない風貌から解ったとの由。

募る話をバス車中につなぎ、JR八王子駅で別れる。

すっかり様変わりした八王子の駅前中華飯店に入り、軽く乾杯。

後日、米本氏からの依頼で、今回のトレッキング・スナップを大和氏宛送付する。一時なりとも、心和んで貰えれば幸いなり。